

# 教育実践例 教材に関する学生の反応と指導

## —英書講読—

佐々木 隆

### プロローグ

2019年度に教職課程の大幅な変更が予定されている。このため、教職課程の認定校は再課程認定を受けなければならいようだ。教職課程の科目担当者はこれに伴い、自身の研究教育業績を今一度見直すことになった。今回は自身の担当科目である「英書講読」（以前は「英語講読」の科目名称）についてこれまでの教材の点検と今後の改善の一助としたい。

### 1 「英書講読」の科目の位置付け

「英語講読」（後に「英書講読」）は卒業要件科目として、教育課程では専門科目のうち、言語コミュニケーション科目の選択科目であるが、教職課程では区分「英米文学」の中に配置された選択必修科目として大学では位置付けられている。（1）区分「英米文学」には「英米文学史」と「英語講読」が配置され、2科目のうち、どちらかを履修する2科目のうち1科目の選択必修科目となっている。区分「英米文学」に配置されたため、講読する英文は英米文学に関するものとなる。筆者は2006年度以降この科目を現在（2017年度）まで担当している。

### 2 使用教材

語学教材は一般に出版されている大学教科書を使用することが多い。しかし、教職課程としての科目の位置付けや半期科目ということもあり、開講前年の拙著『英語講読—シェイクスピアから現代まで—』（2005）を出版した。その目次を紹介しておきたい。「第1部 名台詞・名句より」「第2部 英語を読む」の2部構成とし、第1部ではシェイクスピ

アをはじめとした英文学の作品から名台詞や『文明の衝突』『イギリス社会史』『聖書』『国連憲章』からの名文を取り上げた。第2部では5つの長文を用意し、英文による日本のアニメを解説や日米比較のもので構成した。掲載したいいくつかの英文を紹介しておきたい。

1 価値観 『ハムレット』より

There is nothing either good or bad, but thinking makes it so.  
(*Hamlet*. II. ii. 249-250)

2 価値観 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』より

It is our choices that show what we truly are, far more than our abilities. (*Harry Potter and the Chamber of Secrets*)

3 価値観 『クリストファー・マーロウ：陰謀家』より

The problems of evil would be no problem at all, if good and bad were clearly labeled in black and white. The difficulties of choices are the source of tragedy. (*Christopher Marlowe: Overreacher*)

4 価値観 『マクベス』より

Fair is foul, and foul is fair. (*Macbeth*. I.i.10)

5 価値観 『ディ・アフター・トゥモロー』より

You never put anything off, because now might be your last chance.  
(*The Day After Tomorrow*)

いわゆる名台詞や名句は read aloud するとともに、内容を理解させるために、解説と鑑賞という項目を設けて、英文をじっくりと読んでいきながら進めた。

当初は英米文学関係の名台詞・名句を中心にしながら進めていたが、実際の短編を原文で読むこと重視して名台詞と名句を組み合わせる授業展開するようにした。大学の wi-fi 環境が整ったこと、ほとんどの学生がスマートフォンを所持し、大学が学生に iPad を無償貸与を始めたこともあり、教材を購入させるのではなく、教員作成自作の教材をネットを通

して配信することとした。これにより学生の経済的な負担をゼロにすることができたこと、教材をなくしても教員がプリントを配布する必要もなく、ペーパーレスで済むことだ。2017年の配信教材は以下の内容である。

#### テキストの内容

- ① 名台詞 ウィリアム・シェイクスピアの作品
- ② 聖書
- ③ 名台詞 その他
- ④ 英文学の作品を読む
  - (1) “The Happy Prince” by Oscar Wilde
  - (2) “The Selfish Giant” by Oscar Wilde
- ⑤ 英語朗読 Sticky Sticky Stumbo
- ⑥ 英語アラカルト

英語アラカルトは英語のクイズである。15回授業の展開はおもに以下の順序で行っている。①→④→⑥で、時間的には15分、60分、15分といったような配分である。①が終了すれば、②、③となる。④は“The Happy Prince” → “The Selfish Giant” → “Sticky Sticky Stumbo”となる。

①、②、③の内容は筆者のホームページ「佐々木隆研究室」<sup>(2)</sup>で公開している「ちょっといい英語」で公開したものを改めて再整理したものである。

③については *Who Moved My Cheese?*, *What Happens Before War?*, UNESCO CONSTITUTION, ワンガリ・マータイの言葉などを集めた。

④の「英文学の作品を読む」は教職課程の教科に関する科目の位置付けであることから、区分「英米文学」の内容を反映させるためである。選択必修となっているもう一つの科目が英米文学史であるため、英書講読では実際の作品を読むこととした。ここ数年は“The Happy Prince”

by Oscar Wilde や“The Selfish Giant” by Oscar Wilde を原文で読んでいる。Oscar Wilde は 1900 年没のため、彼の著作物には著作権が消滅しているため、原文もすべて Oscar Wilde の専門サイトから原文を入手できること、短編であるため、15 回の授業でも十分に読みこなせることが魅力である。すでに翻訳も数種類出版されていることから、訳す授業ではなく、read aloud を中心に行った。その中にも名句などもあり、じっくりと味わうことができる。また、アニメであるが、それぞれ映像化された作品もあり、日本語字幕、英語字幕等を活用しながら、read aloud のあとに部分鑑賞なども行うことで内容やイメージの確認などもできた。

⑤の英語朗読“Sticky Sticky Stumbo”ではじまる英文の Read Aloud を行った。3～5 分程度で読めるものである。見本の Read Aloud は筆者自身が行った。

⑥の英語アラカルトは英語のクイズ的な内容のものである。

### 3 学生の反応

① ② ③については日本語に訳すという点についてはやや困難なところもあった。しかし、内容がわかると英文に親しみが湧いたようであるが、特に新しいものほど学生の反応がよかった。『ハリー・ポッターと秘密の部屋』のように学生が映画等で観るものについては関心度はたかった。英文で実際に作品を読む機会がほとんどない学生にとっては刺激であったようだ。特に、流行の映画作品の台詞を実際の英語で触れてみるというのは意外にないということがわかった。学生は原書をほとんど読まないことから、字幕スーパーの映画であれば、「聞く」ということから台詞に触れ、吹替で観る学生は日本語でしかその台詞を知ることができないからだ。映画はもちろんであるが、原書、場合によっては英語のシナリオなども入手し、その一部分から名セリフとして学生に紹介することとなる。市販されている名セリフ集などもあるが、今の学生にマッチングしたものは少なく、どこか高尚なものが多い。学生が全般的な活

字離れはしているものの、映画等への関心は相変わらず高いため、学生の関心と英米文学の原文との接点を探った。また、聖書からのものは、結婚式などでよく用いられる誓いの言葉などの原典となる「コリント人の第1の手紙」などを紹介した。

Love is patient; love is kind and envies no one. Love is never boastful, nor conceited, nor rude; Never selfish, not quick to take offence. Love keeps no score of wrongs.... Love will never come to an end.... In a word, there are three things that last for ever: faith, hope, and love; but the greatest of them all is love. (*1 Corinthians. 12:4–13:13*)

実際に使われるものだけにやはり関心は高かった。“last”が動詞で使用され、「続く」の意味となっていることや、“love is patient”などのフレーズはこれが原典であったとかいう関心も寄せられた。英米文学と聖書の関係は深く、シェイクスピアなども聖書からのフレーズを台詞として利用するなど、英訳聖書も十分活用が可能である。<sup>(3)</sup>

④の英米文学作品を *rewrite, retold, simplified* のものではなく、まさに原文をそのまま読むという経験は英米文学科といったような専門的な学科でなければそうないであろう。15回の授業という制約された授業では原文に触れるとしても、フレーズとして名句でとどまることが多い。作品を1つ読むということの達成感はある。実際授業では翻訳がすでに出ていることから、筆者自身による *model reading* のあと学生にも輪読方式で *read aloud* させている。学生の *read aloud* で最も気になるところは英語特有の *linking* である。通常は *listening* などで相手の発話を理解する時に有効なものとなるが、実は *reading* においてもこれが有効に活用できれば、実際のコミュニケーションでも有益である。

音声学で用いられる概念で、語の最後の音と次に来る語の最初の音を連結する音変化を指す。英語に顕著に観察され、打ち解けた会話では特に頻繁に生じる。linking を理解し、慣れることで聞き取りが促進される。<sup>(4)</sup>

reading の際にこうしたことに注意させることで、listening の際にも応用できることになる。4 技能を意識した時、単独でそれぞれの技能を扱うことがあるが、他の技能を意識することで、4 技能の習得につながるからである。

選択科目のため、履修者は年により人数はことなるが、おおよそ 15 人～30 人程度である。この意味で言えば、語学の授業として理想的な人数である。翻訳も合わせて輪読するため、同時に内容も頭に入る。特に“The Happy Prince”は「幸福な王子」として知られ、学生も小さい頃に触れた経験のあるものが多く、初見という学生の方が少なかった。“The Selfish Giant”は「わがままな大男」としてこれも童話集に収録されているが、認知度としてはこちら方はかなり低かった。他の候補としては“The Nightingale and the Rose”があり、これもいずれは取り扱ってみたいと考えている。とにかく重要だと考えていることは、1 つの作品を読み切るということである。

⑤は read aloud の際に読みのスピードを変えるところが大きなポイントとなる。落語の寿限無ではないが、“Sticky Sticky Stumbo Nos E Rumbo E Pro Penny Hara Bara Brisko Nicky Prom Po Nish No Menyo Dumbricko”が名前となっている。これを breath なしで読むこと、繰り返し出てくるため、場面に合わせて、最初はゆっくりと、中盤はテンポよく、後半は速く読むことが求められる。学生はほとんど体験したことのない経験となろう。全体の話も簡単な英語で構成されているため、読むための教材としては最適である。

⑥はクイズ的なもので、おもに英語のクロスワードパズルに取り組んでいる。時間は 10 分～20 分程度であろうか。英語で考え、英語で解答

することになる。何を問われているのかも英語から発想しないとこの類の問題はできない。最初は予定よりも倍以上の時間がかかるが、慣れてくると、スムーズにできるようになる。発想力も求められるため、英語以外の能力も活用することになるため、英語が苦手な学生が意外な力を発揮することがある。辞書等を使用しながらするため、問題をとくためには知らることが必要となるため、結果的には学生が辞書を持参することが自然に身についてくる効果もあった。

#### 4 英語と如何にして触れていくか

英書講読の最大の目的は英米文学を中心に、英語で書かれた文章を鑑賞できるようになることを目指している。いわゆる単なる訳読式の授業ではない。そのため、read aloud を多用している。いわゆる英語のできる学生であっても read aloud をさせると、発音やイントネーションに大きな間違いがなく読める学生も中にはいる。しかし、単に、平坦に読まれても、そこからは何も感じない。もう一步踏み込んで聞き手を考えて読むということを意識させる授業である。母語においてもそうであろうが、会話の時にはロボットのような平坦は言い方にはならない。しかし、これが読みになると、ロボットやフラットな発音になり、まるでお経のような英語の読みになる学生がよくいる。ひとつには、単語ひとつひとつの発音に自信がないといったところが大きな原因である。breath の位置も不適當なところで行われるため、耳障りもよくない。こうしたことを少しでも解消できるように read aloud は必要である。いわゆる英会話やスピーチにも連動していくものと思われる。

名句や名せりふ、名言では実際に触れていく英文はできるだけ短いものにしていく。すでにことわざになっているものもあろう。身近ですぐ目にしている、耳にしているが、あらためて考えたことがないような、英文ほど学生にはなじみやすい。英和辞典でよく出てくるような例文が、実は、有名な作品の台詞であることも珍しくない。特にシェイクスピア

の場合にはこうした現象が起きやすい。

All that glisters is not gold. (*The Merchant of Venice*)

The evil that men do lives after them,

the good is oft interred with their bones. (*Julius  
Caesar*)

It was Greek to me. (*Julius Caesar*)

受験用の英語ではないため、説明の仕方も変わってくる。“All’s Well That Ends Well.”は「終わりよければすべてよし」はよく使われる言い回しであるが、これはシェイクスピアの作品名そのものである。“As You Like It”も「お気に召すまま」も同様である。こうした英語辞典に記載されている例文には文学作品中からとられているものが多く、この意味で文学の果たしている役割は大きい。

## エピローグ

授業科目「英書講読」が教職課程の「英米文学」に区分の選択必修の科目であるという位置付けであることを再確認し、これまでの教材に関する点検と改善について報告してきた。原文による名句や名台詞については「英米文学史」でも取り上げている。また、大統領就任演説やノーベル賞の受賞演説等については「Advanced English Reading」で取り扱い、できるだけ重複を避けた。奇しくも、筆者自身が担当しているため、教授内容の棲み分けが自然と出来る状態である。

現在の学生が reading について高等学校時代はほとんど指導を受けていない様子であるため、学生の英語による活動を増やす意味でもこの reading は今後も続ける予定である。但し、取り扱う原文（英文）については学生に馴染みのあるもので、かつ短編のものであれば、他の作品を考えてもよいかもしれない。現状取り上げている“The Happy Prince”



と“The Selfish Giant”はアニメとは言え映像があり、メディアミックスという時代にあった教材になりうるものではないかと思える。

## 注

- (1) ここで言う大学とは2004年に開学した武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部。なお、「英語講読」は3・4年の配当科目のため、科目自体の開講時期は2006年であった。
- (2) ホームページ「佐々木隆研究室」(<http://www.econfn.com/ssk/>)の「ちょっといい英語」は以下のように公開した。現在も閲覧可能である。
  - ・「日本人が知らないちょっといい英語Ⅰ」(全30回)
  - ・「日本人が知らないちょっといい英語Ⅱ」(全20回)
  - ・「ちょっといい英語Ⅲ」(全20回)
  - ・「ちょっといい英語Ⅳ」(全30回)
- (3) 聖書と英米文学、シェイクスピアのおもな研究書は以下の通りである。

大塚高信『シェイクスピア及び聖書の英語』研究社出版、1951年7月。

ピーター・ミルワード／野坂秀男訳『新約聖書と英文学』中央出版社、1971年7月。

山本俊樹編『聖書と英文学をめぐる』(神田盾夫博士傘寿記念論文集)ペディラヴィウム、1982年3月。

ピーター・ミルワード／安西徹雄訳『シェイクスピアの人生観』新潮社、1985年1月。

ピーター・ミルワード／安西徹雄訳『シェイクスピア劇の名台詞』講談社、1986年7月。

ピーター・ミルワード／別宮貞徳訳『英語の名句・名言』講談社、1998年5月。

(4) 米山朝二『新編英語教育指導法事典』(研究社、2011年8月)、p.190.

【キーワード】 英書講読、read aloud、Oscar Wilde、linking

執筆者一覧

佐々木 隆 武蔵野学院大学教授

武蔵野教育研究 第3巻第8号

2017年6月1日 発行

武蔵野教育研究会 編集・発行

〒350-1328

埼玉県狭山市広瀬台3丁目2番1号

武蔵野教育研究会事務局

武蔵野学院大学 佐々木隆研究室